否定語をイメージで捉え直す

～no/not、準否定 little/fewを通じて～

総合政策学部３年　70701546

遠　藤　　忍

s07154se@sfc.keio.ac.jp

目　次

導入～問題発見　2
noとnot　4
準否定 little/few　7
最後に～文法指導への提言　10
参考文献　11

I. 導入～問題発見

雑多な文法指導

私は、学習塾の中学３年生に対して、以下のような安易な説明を行ってしまった。

ex.1
[either A or B]【AかBかどちらか一方】[i]という形に、
そのまま「*n*」をつけてみると、*[neither A nor B]*【AもBもない】[ii]になる。

構造としては、たしかに見た目上、「n」をつければ意味が変化するということは本当のことである。しかし、意味上はeither…がAとBのどちらかを選択するという意味なのに対して、neither…は選択の余地無くどちらも否定されている。感覚としては、[Both A and B]【AもBも両方とも】[iii]と対極にあるように感じられる。

これでは説明が雑多すぎる。ただ「n」さえ付ければよいという問題ではないにもかかわらず、このような説明に終始してしまう自分が悔しく感じる。このような雑多な説明の例は他にも存在する。たとえば、

ex.2　*not* V *any* ~ = *no* ~

がその一例である。

二重否定的誤り

しかしex.1より高度な説明をしたとしても、彼らの頭の中にそれが定着するかどうか不安である。なぜなら、彼らの中には

ex.3　*Neither he nor she cannot ski.*

という誤りを犯す者さえいるからだ。これは他の否定語に関しても同じことが言える。

ex.4　*I don't have no money.*
ex.5　*I have not never been to Tokyo.*

つまり、notではない否定語を用いているにもかかわらず文中でnotを使用し、二重否定とも取れる表現を犯してしまいがちなのである。否定の意味を表す場合は否定形、という意識が働くため、こうした誤りが現れるのだろう。これは第二言語として英語を学ぶ者だけでなく、第一言語（母語）として英語を習得する子どもにおいても起こる現象のようだ。

混同する準否定語

先ほど挙げたex.5に似た誤りに、little/fewの準否定語の用法が挙げられる。この準否定語は、もちろん否定の意味を持つのに肯定文をとる形である点で習得が難しい。だがこの用法が学習者を混乱させる要因はもう一つある。すなわち、冠詞「a」がつくかつかないかで意味が変わるのである。冠詞がつけば肯定の意味を持ち、つかなければ否定の意味を持つ。前者を先に覚えてしまうと、なかなか後者が否定の概念を示すことを意識しづらい。したがって、

ex.6.1　*I have a little money.*=>　　○私は少しのお金を持っている
ex.6.2　*I have　little money.*=>　　×私は少しのお金を持っている

---

[i] 高橋、根岸，2003，p430
[ii] 同上
[iii] 同上

というように、ex.6.1とex.6.2をそれぞれ訳したときに両者の意味の区別ができない誤りが考えられる。もちろんex.6.2の本来の訳は「私はほとんどお金を持っていない」である。しかし、準否定語であることを理解しないため用法の混同が起こってしまうだろう。

本稿の目的と手法

以上のような問題意識から、本稿では否定語・否定表現について、コアの意味を「イメージ」として捉え直す試みを行う。

具体的には、ex.2とex.4で扱ったnoとnot、ex.6で扱ったlittle/fewについて、

1. 文法書・辞書に掲載されている用法および用例を収集する
2. 意味をコアイメージ化して視覚的に理解しやすい状態にする
3. 分析、考察をする

という順番に捉え直しを行う。

今回提示するコアイメージは筆者のオリジナルである。今回扱う語彙項目は、比較対象としての価値はあるものの、多義語ではないため、コア機能を捉えるのは容易かもしれない。しかし、今回の目的はコア機能の特定ではなく、その機能を概念図＝イメージとして表し、否定語の役割を、一部ではあるが捉え直す物である。したがって、今回の一つのゴールは、コアイメージを作成する事にある。

なお、今回のコアイメージ化において、イメージを見るであろう対象者は学校教育の中で第二言語として英語を学ぶ日本人を対象とする。したがって、用法・用例の収集は英和辞典から行う。また、使用する文法書は、日本の高校生が使用する英文法の参考書とする。両者とも、コアイメージを見た日本人が、その感覚を日本語を伴った説明で理解するために日本語で書かれたものを用いる。

II. noとnot

notの用法

文法書の解説を見ると、notには以下のような用法がある[iv]。

1. 文を否定するnot
   …＜主語＋動詞＞の結びつきを否定し、文の内容全体が否定される
2. 語・句・節を否定数not　…直前にnotを置く
3. I don't think ~ 「～でないと思う」（notの繰り上げ）
4. 否定の節の代わりをするnot

辞書においては、notに関する用法解説は前述の文法書の解説とほぼ同様である。参照した二つの辞書[v]において、ほぼ同じワードで説明が成されていた[vi]。

notの用例

上記１～３の用法について、以下用例の文をまとめると、

1. *Mr. Robinson was not sure of his success.* (文)
   I'm not hungry. (今、腹がへっていない）(ジ)
   This is not [isn't] a book. ⇒ 本ではない. (リ)
2. *She's my daughter, not wife.* (文)
   He went to America not long ago. (彼は先ごろ米国へ行った) (ジ)
   I begged him not to go out. ⇒ 外出しないように頼んだ. (リ)[vii]
3. △I think (that) he won't come.
   ○I don't think (that) he'll come.　(文)

noの用法

一方のnoについて、文法書では、「no＋名詞」という表題で、「形の上では主語などの語を否定するが，意味の上では文全体を否定する．」[viii]とされている。また、

・S is no (+Adj.) + Noun：Sは決して～でない、～どころではない

という用法も併記されている[ix]。辞書には、

1. 文否定「少しの…もない(not any)」「ひとつの…もない(not a)」(ジ)「ほとんど…ない」(リ)
2. be動詞の補語(名詞)または形容詞＋名詞に付けて「決して…でない」(ジ)
3. 語否定「…のない」(ジ)「ない」(リ)

という用法で説明がなされている。

[iv] 高橋､根岸，2003，p.449-451

[v] 以下、用例を示す場合には末尾に、ジーニアス英和大辞典出典のものは(ジ)、リーダーズ英和＋リーダーズ・プラス出典のものは(リ)、文法書（高橋､根岸，2003）出典のものは(文)を示す。

[vi] ただし、二重否定や部分否定に関する項目は、文法書では別項目として扱われていた。

[vii] この例は「不定詞・分詞・動名詞に先行してそれを否定する」という用例である

[viii] 高橋､根岸，2003，p.452

[ix] 同上

noの用例

前述の用法について、用例は以下のようになっている。

1. *No boy can answer it.* (それに答えられる少年はいない)　(ジ)
   There are no clouds in the sky. ⇒ 空には（少しの）雲もない．(リ)
   No money was left. (お金は少しも残っていなかった．)　(文)
   We had no classes yesterday. (昨日は授業は何も無かった．)　(文)
2. *He is no fool.* 彼は決してばかなどではない　(ジ)
   I am no match for him. ⇒ 彼にはとてもかなわない. (リ)
   It's no joke. （決して冗談ではない．）(文)
3. *No news is good news.* 便りがないのは良い便り (ジ)

notとnoのコアイメージ

以上の用法・用例を考えると、以下のイメージをコアイメージとして用いることができる。

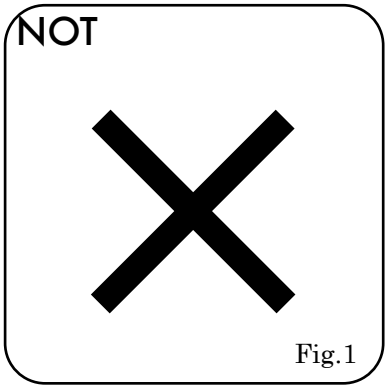

Fig.1

NOTのコアとして考えたのは、とにかく対象を否定する、というものだ(Fig.1)。対象を×で否定しているが、それはつまり、かならず○が存在するということも示している。クイズで言いえば、不正解があれば必ず正解がある、というのと同じである。

たとえば、文否定のnotは文がそもそも示している事柄全てに対して×をつけている。*I'm not hungry.* の場合は、「空腹である」という状態に対して×を付けて否定をしている。*This isn't a book.* の場合、thisが指し示しているものとして考えうる「本」に対して×を付けている。それはつまり、thisが指し示しているものは本ではない「なにか」である、ということの裏返しである。語や句や節を否定する場合も、該当する部分に×を付けるイメージである。*He went to America not long ago.* については、long agoに×を付けることで近い時期であることを示している。*I begged him not to go out.*については、to go outに×を付けることで、外に出ることを否定している。外に出ないということは、代わりに中にいることを示すので、×の代わりに○が存在しているということが理解できる。

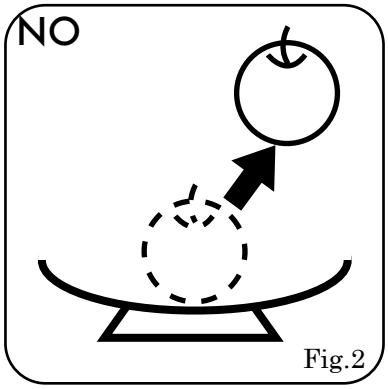

Fig.2

NOのコアとして考えたFig.2は、皿の上にあったリンゴがなくなっているという意味である。皿の上には何も無い状態だ。つまりこのイメージでは「何も無い」ということを示したいのだ。何も無いということは、代替可能性も無いということになる。

例えば、*No boy can answer it.*の場合、答えられる男の子は誰もいない。ここには代わりに答えてくれる男の子の存在が想定されていない。*No money was left.*は、全くお金が残っていないということが強調されて浮き出てくる。これも代替可能性が無いということ

の裏返しなのかもしれない。 *No news is good news.*についても、便りが一切ないということを理解するにはそう難しい解釈は必要ないだろう。

ポイントは、「Sは決して～でない、～どころではない」をどのように解釈するか、である。*He is no fool.*を例にとって考えてみよう。この場合、「彼」という器のなかに「ばか」という要素が入っているかどうかで検討してみると、foolの前にnoがあるので、器の中に「fool」という要素は含まれていないことが分かる。従って、彼にばかという要素が無いから、彼は決してばかではない、という訳を導きだすことができる。同様に、*I am no match for him.*であれば、「私」という器のなかに「彼に匹敵する」要素が入っていないので、彼にはかなわない。*It's no joke.*なら、「それ」という器の中に「冗談」という要素が入っていないので、冗談ではない、となる。

コアイメージをふまえた考察

以上のコアイメージの解説の中で、重要な概念になるのが、一つに代替可能性、もう一つに「対象の否定」と「対象の存在」の違いである。

前者について、notであれば、×を示せばその裏に○があるように、否定されたものの背景には別のものが存在することの示唆を含むように感じる。一方のnoは、器の中には何も無い状態なので、どれだけ探しても別の者は存在しない、という概念を導くことができる。後者は、前者と関連しているが、noについては対象が存在しているか否かに関心がある一方で、notの関心は対象を否定することのみに向いている。

このように考えれば、「＜主語＋動詞＞の結びつきを否定」というnotの用法説明も、「no＋名詞」というnoの解説の表題も、理解ができる。notは状態（＝主語＋動詞）を否定することに関心を持ち、noは名詞（＝もの）を志向しているのである。

以上のコアイメージを使えば、

ex.4　*I don't have no money.*

がいかにおかしな文であるかが分かる。あらかじめ「ない」と言っている状態をさらに否定する必要は無い。なんでもかんでも、「否定の意味なら否定形」というように覚えず、このコアイメージを掴めば、意味の上から使い分けがうまくいくようになるのではないか。

III.準否定 little/few

little/fewの問題点と辞書的意味

littleとfewの用法に関する問題点は、I章で述べた通り、冠詞が付くか付かないかで否定/肯定の意味が変化することがややこしい、というものである。とくにlittleについては、考えうる意味が「小さい」と「少ない」の２つがあるため、混乱を招きやすい。では、littleおよびfewの辞書的意味はどのように記述されているのだろうか。

littleは、形容詞として次のような意味で記述されている。

1. 小さい（smallが客観的に小さいことをいうのに対し、しばしば小さくてかわいいという愛情・同情・時に軽蔑の気持ちを含む）、若い；年下の(ジ)
   小さい、若い、年少の、かわいい (リ)
2. 短い（距離・時間などが）(ジ)　短い(リ)
3. (aをつけて)少量の、少しの、わずかな　(ジ)　少しは、わずかながら(リ)
   (aを付けずに)ほとんどない (ジ)(リ)
   (the~/what~)なけなしの (ジ)(リ)

また副詞としては、以下の意味で記述されている。

1. (a ~)少しは、やや (ジ)(リ)
2. まったく…ない (ジ)　(知覚動詞の前において)全く…しない （not at all）(リ)
3. ほとんど…ない、少しも…ない (ジ)　ほとんど…しない (リ)

一方のfewは、形容詞・代名詞・副詞としての用法があり、以下のように記述されている。

【形容詞】

1. (無冠詞で、「無い」ことに焦点を当てて)ほとんどない、わずかしかない (ジ)
   少しの…しかない, ほとんどない, ほんの少数の (リ)
2. (a またはそれ以外の決定詞や形容詞を伴って)いくらかの、少しの (ジ)
   ないことはない, 少しはある (リ)

【代名詞】

1. ほとんど…しかないもの[人] (ジ)　少数 ; 少数の選ばれた人 (リ)

【副詞】

1. 少々、幾分 (ジ)

littleの形容詞用例

以下、ここでは形容詞での用法に焦点を当てて、用例を見ていこう。

1. *She was only a little girl when her mother died.* (ジ)
   a little group of artists　⇒ 芸術家の小団体. (リ)
   the little Smiths　⇒ スミス（家）の子供たち (リ)
2. *We spent a little time in Rome.* (ジ)

3. *I had a little difficulty getting a taxi.* (ジ)
There is a little hope. ⇒ 希望が少しある. (リ)
I have very little money left. お金はほとんど残っていない (ジ)
We had little snow last year. ⇒ 去年は雪が少なかった. (リ)
I gave him the/what little money (that) I had. ⇒ なけなしの金を全部やった. (リ)

littleとsmallの比較

さてここで、コアイメージに基づいた編纂がされているエクスプレスEゲイト英和辞典でlittleを引いてみると、さきほど述べた「smallが客観的に小さいことをいうのに対し、しばしば小さくてかわいいという愛情・同情・時に軽蔑の気持ちを含む」と全く同じ内容がイメージとして書かれている。

そのイメージ図の掲載は割愛するが、littleには女の子・ネコ・小鳥が書かれており、smallにはS・M・Lサイズのシャツが書かれている。ここから、smallには客観性が、littleには話し手の感情がそれぞれ含まれていることが示されている。

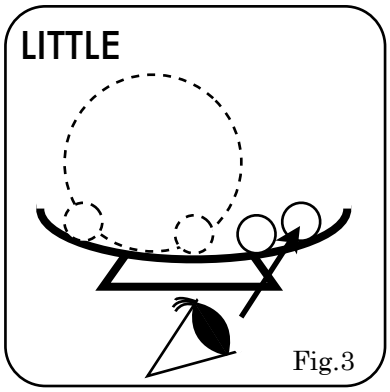

Fig.3

littleが一つのコアイメージで示されるのであれば、「小さい」「かわいい」という意味で使われる時も「少し」や「ほとんどない」の意味で使われる時も、等しく話し手の感情を表す事になるだろう。

左側に、オリジナルのlittleのコアイメージを掲載した(Fig.3)。これは、器の上に乗っている小さな球を主観的に見ている図である。この器には、もっとたくさんの小さな球が乗るはずであるし、あるいは大きな球を乗せる事もできるはずである。しかし実際に器の上に乗っているのは１、２個の小さな球であるから、大きさで見れば「小さい」、個数で見れば「少し」である[x]。あくまでポイントは、これが客観的事実ではなく主観的感覚であるということだ。

このコアイメージのうち、数量的な感覚を表す部分について解釈を飛躍させれば、littleもfewも、どちらも客観的事実よりも主観的感覚を表す表現である事が考えられる。

littleとfewと冠詞の関係性

littleとfewがそれぞれ肯定の意味を示すか否定の意味を示すかは、実は客観的事実ではなくて主観的感覚によるのではないか、という仮説をたてることができた。littleのコアイメージが、数量を表す部分においてfewにも転用できるものとして考えればうまく理解できる。

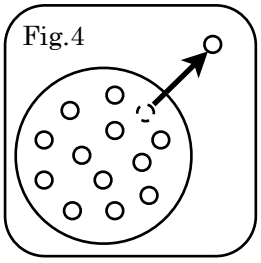
Fig.4

では、冠詞の有無が肯定／否定に与える影響を考えていきたいと思う。まず、冠詞 a について、そのコアを整理しておきたい。佐藤(2009, p.114)によれば、 a のコア機能は「複数化あると想定されるものの中から一つを取り出

[x] ただし、littleは不可算名詞につくというルールを持っているため、このコアイメージは本来的には間違っている。だが、ここでは数量的な少なさを示したかったのでこのような図になった。

して（単一化して）捉えるということ」である。Fig.4は、佐藤(2009)の同ページに掲載されていた図である。複数あるうちから一つを取り出している。冠詞 a の機能がこの概念図によって説明づけられるならば、先ほどのlittleのコアイメージを発展させて、冠詞が付く場合と付かない場合で肯定／否定がどう異なるかということを説明する事が可能になる。それがFig.5である。

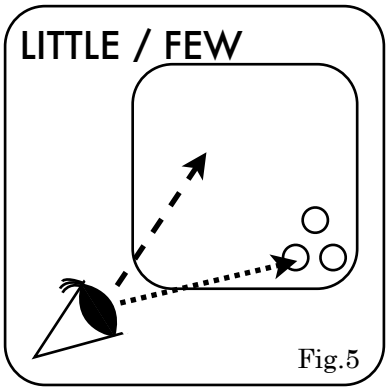

Fig.5

このイメージにおいて、目線が２種類ある。細かい点線の矢印は３個ある丸い球を、荒い点線の矢印は何もない範囲を見ている。前者が冠詞 a が付いた場合、後者が付かなかった場合である。四角の範囲の中には、確かに３個の球が入っているのであるが、それを単一化して取り出さない場合には、「ほとんど範囲の中には何もない」という意識が働く。一方、３つの球に視線が行く場合は、取り出して単一化していると考える事ができるため、「球が少ないけれどいくつかある」と捉える事ができる。

このイメージを適応すれば、 *There is a little hope.*も、あまりたくさんの希望が無いなかでごく少数の希望に対して目線を向けている事が読み取れるし、*We had little snow last year.*については、事実雪が降ったとしても降っていない時の印象が強かったという事が読み取れる。結局は、冠詞 a が付くか否かは話者の主観において対象を単一化するか否かであるから、little / fewがそれぞれ肯定を示すか否定を示すかは主観的感覚によるという仮定はどうやら正しいようだ。

分析をふまえた考察

以上見てきた通り、few / littleの区別は、littleのもともとのコアイメージと冠詞 a のコア機能の二つを理解することによってできる。そしてFig.5に行き着いて、ようやくその用法の違いに気付くことができた。

冠詞の付かないlittle / fewについては、目線が何もないところを志向している点でnoのコアイメージに近い。noをイメージとして捉え、文にした時に正しい用法で用いる事のできる人は、冠詞を付けるか否かで意味が変わる、という点でも間違いを犯す確立は低いのではないだろうか。

本来であれば、なぜ可算名詞がfewで不可算名詞がlittleなのか、ということについては更なる検討の余地が考えられたが、そこまでをカバーしうる資料がなかったというのも正直な所である。しかし、fewとlittleが本来的には別個の意味を表す言葉でありながら、準否定語としての機能をイメージ化すると共通して理解ができることは証明できた。

IV.最後に～文法指導への提言

以上、no/notとlittle/fewを用いて否定語をイメージずから捉え直す試みを行ってきたが、いずれにしろイメージとして文法を捉える試みは学習者に取って直感的な理解を促すため効果的であると言えるのではないだろうか。

単なるルール・グラマーを教えているだけでは、数ある用法のその全てをいちいち暗記する必要があり、非常に手間がかかる。そのくせ、学習した知識は定着済みであるという前提にたって問題が課されるので、これくらいしかできないのか、という評価を得がちである。

「こうだからこうなる」という説明は、かなり雑多であり、学習者の理解が追いつかないうちはなかなか正用を促す事ができない。しかし、コアイメージ図のような直感的理解があるだけで、かなり区別をつけて理解をすることができるようになると考える。その点で、レキシカルグラマーを分析し、共通項を見つけていく作業は、学習者にとっても言語習得の一助になるし、教える側にとっても子ども達を飽きさせない状態で用例知識と用法感覚を身につけさせるためのよい教材提示の練習になる。

教わる側も、教える側にも、これまでの既存の文法学習枠組みではない、新しい枠組みの中で、学習事項を捉え直していく必要があるのかもしれない。

参考文献

- 高橋　潔、根岸雅史＝編．新訂版 基礎からの新総合英語．東京，数研出版，2003，518p.
- 佐藤芳明、田中茂範．レキシカル・グラマーへの招待．東京，開拓社，2009，230p，（開拓社 言語・文化選書，９）．
- 小西友七、南出康世＝編集主幹．ジーニアス英和大辞典．東京，大修館書店，2001，2508p,
- 松田徳一郎 ＝編．リーダーズ英和辞典．東京，研究者，1999，（インターネットデータベース『eRef』http://www.eref.jp/ を利用）
- 松田徳一郎 ほか＝編．リーダーズ・プラス．東京，研究者，1994，（インターネットデータベース『eRef』http://www.eref.jp/ を利用）
- 田中茂範、武田修一、川出才紀＝編．エクスプレスEゲイト英和辞典．東京，ベネッセコーポレーション，2007，1677p